

「地域と連携し、できることから始めよう！」

「放送開始 80 周年を機に BS デジタル放送に視聴者の制作した番組を放送する時間帯を設けること」

03 年秋闘における日放労の要求だ。

それから 6 年…、

NHK 内外でメディアリテラシー※¹に着目したさまざまな取り組みが進められている。

富山県のチューリップテレビでは、05 年度からパブリックアクセス番組※²を始めた。地域を、視聴者を放送に巻き込むことにはどのような意義、そして苦労があるのか。その発案者であり、総合プロデューサーである編成技術局長の服部氏に聞いた。

(このインタビューは 2009 年に行いました)



服部 寿人 チューリップテレビ 放送本部編成技術局長

プロフィール

1962 年生まれ。2000 年 7 月に JNN 系列・青森テレビから同チューリップテレビ（富山県）へ移籍する。20 年余り報道畑を歩み続け、2005 年から編成の責任者となり、現在は編成技術局長。編成への異動をきっかけにパブリックアクセス番組に取り組んだ。現在も住民ディレクター活動を継続しており、放送に向けて取材・制作中。

「放送局のちから」を発揮するために

NHK は、2008 年度「経営計画」で、「地域を元気にするための拠点となります」との方針を掲げています。そのなかで、次のように謳っています。

地域の視聴者のみなさまにとって「いつでも、どこでも、もっと身近に NHK」であるために「放送局のちから」を充実させます。

方言をもっと大切にした放送・サービスがあってもいい。放送局のサポーターを募り、一緒にイベントを企画してもいい。地域放送の時間の長さを競うのではなく、放送局が自らの判断で地域の個性を引き出すような放送やサービスを展開し、視聴者のみなさまとの活動をさらに充実させていくことが次の 3 年間の目標です。

視線を富山県に移すと、「チューリップテレビ」では、2005 年から、パブリックアクセス番組である『住民制作！ふるさとテレビ』※³を放送しています。まさに「放送局が自らの判断で地域の個性を引き出すような放送」です。パブリックアクセス番組については、その長所短所、さまざまな意見があります。チューリップテレビでは立ち上げの際にどのような葛藤があったのか、継続していくためにどのような工夫をしているのか、4 年目を迎える今年度は何をめざすのか：企画を発案・実行し、今も総合プロデューサーとして活躍されている編成技術局長の服部寿人さんにお話を聞きました。

「地域づくり」「人づくり」※4

——パブリックアクセス番組を始めようと思われたきっかけは何ですか。

2005年にスタートさせた直接的なきっかけは、私自身の人事異動です。それまで報道一本だったのですが、その年の異動で編成局へ移ることになりました。編成の総責任者として番組枠の検討に携われることとなったため、ちょうど良い機会だと考え、社内に提案しました。

でも、実はパブリックアクセス番組の制作は、報道にいた頃からずっとやりたかったことでした。報道に携わる人は皆そうだと思いますが、「良かれ」と思ってニュースを送っています。しかし、とあるニュースを放送した際、▼テレビ局が伝えたいと思ったことと、▼取材相手が伝えて欲しかったことにギャップがあることに気付かされました。つまり、自分や会社が「良かれ」と思っていることは、実は単なる「独り善がり」なのではないか、そう思わされたことがあります。その後も業務を遂行しつつ、地域密着とは何か、視聴者目線とは何か、真剣に考え続けました。そして、取材相手に対し、自分が何をどう思っているのか、ニュースにしたのか、取材相手にきちんと向き合い、正直に説明することが必要なのではないかと、思い至りました。私は、こうしたことを記者やディレクター一人ひとりに任せるのではなく、会社として地域に、視聴者に向き合うために取り組むべきではないかと考えました。このことはテレビ局による「地域づくり」「人づくり」であり、それを局の住民情報ネットワークに発展できれば、「地域密着」という局の経営方針にも合致します。

また、一つひとつの番組に対して、説明を加えていくだ

けでなく、もっと広くテレビ局のことを知ってもらいたいとも考えました。本場にテレビ局のことを知ってもらうためには、番組づくりのプロセスやそれに携わる人たちを知ってもらおうとともに、実際に作ってもらおうことが一番です。パブリックアクセス番組はまさにうってつけの機会だと考えていました。

——どのような目的で始められたのですか。

第1に、ニュースや番組がどのように制作されているのか、その過程を見てもらうことです。1時間もインタビューしたのに、なぜほんの1分程度しか放送されないのか、どんな人が取材・制作・編集しているのか、実際に番組作りにも携わってもらおうことで、理解してもらいたいと考えました。第2に、地域に住んでいる人たちが、テレビ局にどのようなことを期待しているのか、直接話を聞くことです。地域の皆さんは日頃どんなことに興味を持っているのか、どんな話題を取り上げて欲しいと思っているのか、ご自身で取材・制作してもらおうことにより示していただこうと考えました。

なお、住民ディレクターが制作した番組を放送すること自体は「目的」ではありません。あくまでも、この2つの目的を果たすための「手段」に過ぎません。こちらのこうした姿勢や考え方が伝わるとだんだん本音で話ができるようになりまし。普通に生活している人たちの、普通の生活の中でしか得られない「生活感覚のある活きた情報」があります。テレビ局にとっても、テレビ局が住民のみならずとこうした裸の付き合いをしていくなかで、活きた情報を得られることは非常に有益です。

※1「メディアアテリアシー(media literacy)」
P 56参照

※2「パブリックアクセス(Public Access)番組」
一般の視聴者が制作した番組。一定の条件のもとに視聴者自身に企画・制作させ、それを放送する番組のこと。

※3「住民制作!ふるさとテレビ」
最初から最後まで、つまり企画から撮影・編集まですべて住民が自主的に創った番組。05年11月に第1回が放送された。

※4「地域づくり」「人づくり」
チューリップテレビは、社のキャッチフレーズとして「フロンティアステーション」地域に提言するテレビを掲げている。そのなかで「私たちは開拓者精神をもつと『ふるさと』を見つめ直し、未来の富山をつくるフロンティアステーションとしての役割を担って『人づくり』と『地域づくり』のチューリップテレビを目指します」と言っている。

「テレビ局の常識」を超える

——提案した際の社内の反応はいかがでしたか。

パブリックアクセスやメディアアリテラシーの必要性そのものについて異議を唱える人はいませんでしたが、番組の質、放送禁止用語・差別発言、著作権などの問題をどうクリアするのか、非常に厳しい議論が続きました。最も高いハードルは、「テレビ局の常識」でした。住民が番組をつくることには異論はないものの、「ナレーションはアナウンサーを使うべきだ」「全体構成はきちんとチェックすべきだ」「ハンディカムは画質が悪いから放送用カメラを使うべきだ」などといった意見が出されました。しかし、局が内容について指導やアドバイスをすれば、住民の目線ではなく、テレビ局の目線になってしまいます。柱である「住民主導」が「テレビ局主導」に変わっては企画の意味がなくなります。テレビ局にしかできないことがあると同様に、住民のみなさんにしかできないことがあります。その意味からも、パブリックアクセス番組は、視聴者が自ら取材・リポートし、自らの判断で構成・編集したものを、自由に発信できるものとしなければ意味がありません。「テレビ局はいわゆる相談役でしかない」と正直に話したうえで、表現や放送法上での問題は出口で総合プロデューサーである私がチェックすることで一応の理解を得ました。



また、パブリックアクセス

番組はスポンサーをとることが非常に困難であり、会社からすればお金にならない、と言うよりお金がかかるだけの取り組みです。さらに「素人」と関わることになりますので、一人ひとりの社員にとっても日々の業務に追われるなか、非常に大きな負担となります。こうしたこともハードルとして立ちはだかりました。最終的には、まず私のほか、私が統括する編成局に属する2人に協力を得て、3人で立ち上げることとし、「とりあえずやってみよう。やってみて不具合が出てきたら、その都度軌道修整しよう」ということにしました。

——走りながら考える、という感じでしょうか。

もともと1回きりの活動にしては意味がないと思っていましたので、回数を重ね、段階を踏み、長く付き合っていくなかで、より良いものとなると考えていました。

また、NHKもそうだと思いますが、今やメディアアリテラシー活動やパブリックアクセス番組そのものに反対する人は局内にはいないはずで、であるならば、「やらないよりは、やってみるべき」とも考えました。考えてばかりではなかなか前に進むことができません。また、体制が整わないことを理由にしているのは一生できないでしょう。頭では必要だと思っているのに、新しい取り組みだけに慎重になる気持ちは理解できますが、それではこれまでの「テレビ局の常識」を超えることはできません。凝り固まった「テレビ局の常識」を超えるためにも、たとえ少人数であっても、その人数でできることから始めることこそが重要だと判断しました。

重要なのは「ともに創るプロセス」

——実際に始めてみて、今どのように感じていますか。
自分のことや生活する地域のことを、自分の目線と切り口で伝えてもらっているとあります。住民が主観的に伝えることが、テレビ局が客観的に伝えるニュースや番組との違いであり、住民テレビの売りだと考えています。

——08年度はメディアリテラシー活動に重点を置かれたと聞いていますが。
砺波高校と福野高校の生徒10人とともに、番組作りをベースにしたメディアリテラシー活動^{※5}に取り組みました。単に「教える」のではなく、送り手・受け手がともに実践し、ともに気付くことが重要です。番組作りをベースにしたことにより、受け手は自ら表現する力を備え、これまで以上に厳しくメディアを読み解くことができるようになりましたし、送り手は10か月あまりに及んだ活動を通じて、地域の放送局としての役割を改めて考えることができました。住民テレビもそうですが、番組を放送することが最終目的ではなく、「ともに創るプロセス」が大切であると実感しました。

継続のカギは「地域連携」と「無理しないこと」

——継続することが非常に難しいことだと思いますが。
09年度は、これまでの住民ディレクター活動を継続することとしていますが、この活動の基本は「地域連携」です。実際、テレビ局だけではなく、富山インターネット市民塾^{※6}と富山大学と協力して取り組んでいます。08年度の高校生とのメディアリテラシー活動に関しても、仕上げの活動発

表会に参加した生徒の父母や高校関係者、取材相手など、多くの地域の方々が集まっていたできました。高校生や住民とテレビ局との単一的な活動ではなく、「地域連携」の枠組みを広げ、機能させることが、今後ステージアップするカギになると考えています。

また、住民のみなさんはそれぞれに仕事や学業を抱えていますし、テレビ局の人間もみんな複数の仕事を抱えていますから、日常業務の合間を縫っての活動とならざるを得ません。そのため、こうした活動を進めるにあたっては、お互いに仕事やプライベートに折り合いをつけてどう時間を確保するか、ということが課題になります。当たり前のことではありますが、誰かが苦しい思いをしてみてください。継続することはできません。自分の仕事や生活のリズムを崩さないよう決して無理をしないこと、これも継続のための重要なカギです。

——NHKでも実施可能でしょうか。

こうした取り組みは、NHKでもできるといっても、NHKの方が向いていると思います。受信料で成り立つということは、もともと「地域づくり」「人づくり」に一役買うことが求められているはずですし、パブリックアクセス番組はこうした目的を達するためにはもってこいの取り組みです。また、民放は多少なりとも活動資金を得るためにスポンサー企業への売り込みが必要となりますが、そうしたことも必要ありま



チューリップテレビ

※5 「(高校生との)番組作りをベースとしたメディアリテラシー活動」
07年2月末に企画立案し、08年12月6日に最終発表の場である番組合評会を開催した。08年11月24日には、「テレビノミカタ」に、「テレビノミカタ」に「泣いた！笑った！つまずいた！高校生113日の記録」と題した60分の特別番組も放送された。

※6 「富山インターネット市民塾」

県、市町村、企業、大学が共同で運営(推進協議会)し地域に開放しているインターネット上のパブリックスペース。ネットを利用し、誰もが講座やサークルを開くことができる。「学びのフリーマーケット」と位置付けている。ユニークな市民講師が各地から参加し活躍している。

http://toyama-shiminjuku.com/

せん。さらに、NHKは全国各地に放送局を有し、それぞれが放送を出しています。それぞれの土地の特色を活かした、さまざまな取り組みが展開できるのではないのでしょうか。でも、決して無理をはいけません。最初はどのような形でも構わないと思います。地域と連携し、できる範囲の体制で、できることから始めれば良いと思います。

インタビューを聞いて

インターネットや服部さんから頂いたDVDで、実際に放送されたパブリックアクセス番組を見させていただきました。そのなかには、住民ディレクターや高校生との打ち合わせに参加されている服部さんご自身も映っていました。しかし、非常に自然です。決して出過ぎることなく、かつ埋没もしていない、「参加者のひとり」として住民の中に溶け込んでいました。これも「地域密着」「地域連携」のひとつの形なのだと強く感じました。

NHKでは毎年のように「地域重視」の方針を掲げてきています。しかし、どれだけ地域に溶け込むことができているのか、生活感覚のある活きた情報を得ることができていたのか、内省せずにはいられませんでした。地域を元気にするために、どのような「放送局のちから」を発揮すべきなのか、「テレビ局の常識」を超えた知恵と工夫が必要だと思いました。

報告 中央放送部長 中村重治